In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	孟郊「弔元魯山十首」をめぐって：「古」の理念と実践
Author	斎藤, 茂
Citation	人文研究. 38 巻 4 号, p.353-387.
Issue Date	1986
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって

――「古」の理念と実践――

齋藤　茂

(一)

孟郊（七五一～八一四）は、中唐期、ことに貞元から元和にかけて主たる活動の時期をもち、韓愈と親しく、ともに並び称された詩人として知られる。[1] その詩は、楽府を中心とした五言古詩形式に優れ、韓愈が「冥觀古今を洞き、象外幽好を逐ふ、空に横たはりて硬語を盤まらしめ、妥帖して力翼を排す」[2] と評するごとく、想像力に富み、硬質な印象のある言葉を駆使した表現に特徴をもつ。また、自ら「塵埃たり徐庾の詞、金玉たり曹劉の名」[3] と歌うように、南朝以来の貴族的な文学を評価せず、漢魏詩の質実雄健の風に模範を仰いだ。そして、韓愈の「其の高きは魏晋より出で、懈らざれば古へに及ばん、其の他漢氏に浸淫せん」[4] との評は、やや褒めすぎであるとしても、漢魏詩を学び、その風骨を復活させたという点に、当時の孟郊に対する評価・認識の基本がおかれていた。

ところで、周知のように、中唐の元和期は、韓愈をはじめ柳宗元・李翺・皇甫湜らによって古文運動が展開され、

復古主義的な傾向が文学・思想に比較的色濃く見られた時期であった。この古文運動を中心とした復古的な活動は、安史の乱後に相対的に地位を高めた士人層が、それまでの駢文に代表される貴族的な文学に代わる、みずからの文学と理念とを求めた動きであり、漢魏以前にその範をとりつつ、それを現実の社会に即して再生させようとするものであった。盛唐後期の李華・蕭穎之・元結らの活動を前駆とし、また元和期においては、士人層を中心に、比較的幅広い活動力と影響力とをもった。

孟郊の文学活動は、この大きな潮流の中に位置し、その一翼を担ったものと言える。だが、彼の保持していた復古の理念は、韓愈らのそれと共通点をもちながらも、一面でかなり特殊な要素を含んでおり、当然のことながら、それが彼の文学のもつ個性、およびその生き方にも反映していたと思われる。したがって、孟郊の「古」に対する意識のあり方を検討することは、その文学・人生観を考える上で必須のことであり、またそれによって、孟郊に対する評価のあり方についても、理解の一端が得られると考える。

本稿は以上の観点に立って、「弔元魯山十首」[5]詩を中心に、孟郊の「古」の理念と実践のあり方について検討するものである。

（二）

孟郊は『新唐書』（巻一七六）の伝[6]にあるように、湖州武康（浙江省）の出身とみられるが、生涯の大半は、長安・洛陽など黄河流域の地で過されたらしい。四十歳を過ぎてようやく科挙に応じたが、それ以前の経歴についてはほとんどわかっていない[7]。だが、その年令からも推察されるように、長安に出て、活動を開始した時点で、彼の文学的・思想的な骨格はほぼ固まっていた。そして、彼の考え方、文学の傾向は、当時の一般的なあり方と大きくかけ離れ

ていただけでなく、会ってたちまち忘年の交りを結んだという韓愈から見ても、一種の驚きをもって受けとめられるものだったようだ。二人が出会ってまもない、貞元八、九年ごろの作と見られる韓愈の「孟生詩」[8]は、次のように歌い起されている。

孟生江海士　孟生　江海の士
古貌又古心　古貌　又　古心
嘗讀古人書　嘗て古人の書を讀み
謂言古猶今　謂ひて言く　古は猶今のごとしと
作詩三百首　詩を作る　三百首
窅默咸池音　窅默たり　咸池の音
騎驢到京國　驢に騎して京國に到り
欲和薰風琴　薰風の琴に和せんと欲す
豈識天子居　豈に識らんや　天子の居の
九重鬱沈沈　九重　鬱として沈沈たるを
一門百夫守　一門　百夫もて守り
無籍不可尋　籍無くんば尋ぬべからず

詩は以下、科挙に落第し、長安での生活もままならぬまま、とりあえず徐州の張建封を訪ねることとなった孟郊を慰

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって　二一

めつつ、再起をうながすのであるが、ここには、古人の書を読んで培った己れの認識、文学がそのまま現在に通用すると信じて長安に出てきた、世間知らずと言えばまことに世間知らずな孟郊の様子が、好意をもって描かれていて興味深い。なかでも注目されるのは、孟郊の容貌と心ばせを「古貌又古心」と表現していることである。おそらくは、古代の純樸さとそれゆえに時流にはなじまない異質さとをあわせもつことを表現したのであろうが、「古」が心だけでなく顔立ちにまで現われていると言い表わされたことは、韓愈の受けとめた孟郊の異質さの度合を示すとともに、孟郊自身にとっての「古」の重みをも語るものとなっていると言えよう。韓愈にとって、この孟郊の印象は強く、それがまた「醉留東野」詩[9]などに顕著に見られる深い敬愛の念を抱かせる一因ともなったようだ。

それでは、韓愈に「古心」と表現された、孟郊の「古」に対する意識のあり方はどのようなものであったのか。孟郊の文章はほとんど残っておらず、その詩にも思想的内容を直接開陳した作品は見られない。だが、彼の詩には「古」字が頻用されており、また詩題にも「古怨」「古別離」等、「古」を冠するものが多く見られる。[10]そこで、その数多い「古」に関する発言の中から、二首例をあげてみよう。

遣興[11]

絃貞五條音　絃は貞し　五條の音
松直百尺心　松は直し　百尺の心
貞絃含古風　貞絃　古風を含み
直松凌高岑　直松　高岑を凌ぐ
浮聲與狂葩　浮聲と狂葩と
胡爲欲相侵　胡爲れぞ相侵さんと欲す

秋懐十五首　其十四[12]

黄河倒上天　黄河倒(さかしま)に天に上るも
衆水有却來　衆水却(もど)り來ること有り
人心不及水　人心は水に及ばず
一直去不廻　一直(ひたすら)に去りて廻らず
一直亦有巧　一直にして亦た巧み有り
不肯至蓬萊　肯へて蓬萊に至らず
一直不知疲　一直に疲れを知らず
唯聞至省臺　唯だ聞く　省臺に至るを
忍古不失古　古へに忍びて　古へを失はざれ
失古志易摧　古へを失へば　志　摧け易し
失古劒亦折　古へを失へば　劒も亦た折れ
失古琴亦哀　古へを失へば　琴も亦た哀し
夫子失古淚　夫子の古へを失ひし淚
當時落灌灌　當時　落つること灌灌たり
詩老失古心　詩老　古心を失ひ
至今寒皚皚　今に至るまで寒きこと皚皚たり
古骨無濁肉　古骨　濁肉無く

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって

古衣如蘚苔　古衣　蘚苔の如し
勸君勉忍古　君に勸む　勉めて古へに忍べ
忍古銷塵埃　古へに忍ぶれば塵埃を銷さん

孟郊の現存の作品は、長安に出た四十歳以降の制作にほとんど集中していると考えられ、また繫年の容易でないものが多いが、前首はおそらく受験時代の、全体の中では比較的早期の作、そして後首は洛陽に居を定めて以後、それもおそらく元和六年以降の最晩年の作と推定されるものである。前首は解釈の上でとくに問題になる点はないだろう。聖王舜の雅声を奏でる五絃琴と松とに自分の姿を託し、堅持しようとする古直さと世俗の妨害との葛藤を歌ったものである。一方後首はきわめて難解であるが、「秋懷」全体にわたって山之内正彦氏の詳細な注解が既にあるので、詳しい解釈はこれに譲りたい。「古」の価値を強調し、これを失ってはならないことを説いた一種の教戒の詩である。

さて、この二首の詩を読んで注目されることは、「古」の「今」に対する優位、その絶対的な価値が提出され、強調されていながら、その具体的内容については、ほとんど触れられていないことだろう。とくに後者の場合は、詩の後半部に毎句のように「古」が言われていながら、それほどまでに強調される「古」の具体的意義については何の言及もない。古代の聖王の徳治に学び、その精神を現在に回復させることの意義などについて、当然開陳されるものと予想されながら、「古」に抽象され封じ込められたまま、ときほぐされていない。はなはだ一本調子で、あたかも〝お題目〟を説えているがごとき印象があり、山之内氏が「この〈古〉は、文化的、社会的な広がりを持たず、いわば無内容な痩せて枯れた倫理的護符といったものでしかない」と指摘されるのも、もっともと思われるところがある。

こうした抽象的・観念的な「古」の叙述は、もとよりこの二首に限られたことではなく、おおむね「古」について

歌う彼の詩のすべてに言えることなのである。韓愈など親しい人々に対してなら、「古」と言えば意味するところを理解してもらえただろうが、「古」を言う詩はそうした人々に見せるためのものばかりではない。むしろ、対社会的にみずからの立場を示そうとする詩が多いのである。したがって孟郊の「古」の理念のあり方自体が、そもそも観念的なものであったと言わなければならないだろう。「古」の理念の根底にあるとみられる儒教倫理についても、孟郊が表わすものは、同様の傾向下にある。著名な「列女操」(14)を見ても、

梧桐相待老　梧桐　相待ちて老い
鴛鴦會雙死　鴛鴦　會ず雙び死す
貞婦貴徇夫　貞婦は夫に徇ふを貴び
捨生亦如此　生を捨つること亦た此の如し
波瀾誓不起　波瀾　誓って起てず
妾心井中水　妾の心は井中の水

と、観念的でかつストイックな倫理観ばかりが印象に残ってしまうのである。このことはまた、孟郊にとって「古」が、そして儒教的な倫理観が、当時の人々に当然共感を得られるはずのものと認識されていたことを示していよう。そしてそれは、「古」と対比され、その回復が求められる「今」に対する彼の認識が、現実的なものでなかったということを示すものでもあろう。韓愈が「孟生詩」で「嘗て古人の書を讀み、謂ひて言く古は猶今のごとしと」と歌うのも、あながち誇張ではなかったと思われる。

そして先にあげた「遣興」と「秋懐」の二首は、制作時期がかなり隔たっていると考えられるにもかかわらず、

「古」の理念は大きく変っていないことがうかがわれるように、孟郊は「古」に対してほぼ一貫した考え方を保持し続けたようだ。それは、同じように「古」への志向をもつ韓愈が、みずからの「古」の理念を時間・経験の堆積とともに社会的に順応させ成長させて、復古運動の旗頭となっていったのとは、異なる態度と言わねばなるまい。もとより孟郊の「古」の理念が社会に受け入れられたからではない。韓愈でさえも一種の驚きをもって受けとめた孟郊の考え方は、一般にはほとんど受け入れられるものではなかった。二度の科挙の落第、およびその後の官界での不遇、それはとりもなおさず彼の「古」の理念の不遇を意味するのだが、にもかかわらず彼はその考え方や実践態度を基本的に変えることはなかった。そして自分の不遇の理由を、「今」は「古」が衰えており、賢者を登用する道が妨げられ、小人・讒人がはびこっているためと考えるのであった。

種樹須擇地　樹を種うるに須らく地を擇ぶべし
惡土變木根　惡土は木根を變ず
結交若失人　交りを結ぶに若し人を失はば
中道生謗言　中道に謗言生ず
君子芳桂性　君子は芳桂の性
春榮冬更繁　春榮え冬更た繁し
小人槿花心　小人は槿花の心
朝在夕不存　朝在れども夕には存せず

「審交」(15)

獸中有人性　獸中　人性有り

形異遭人隔　　形異なれば人の隔てに遭ふ
人中有獸心　　人中　獸心有り
幾人能眞識　　幾人か能く眞に識らん
古人形似獸　　古人　形　獸に似るも
皆有大聖德　　皆　大聖德有り
今人表似人　　今人　表は人に似るも
獸心安可測　　獸心　安んぞ測るべけん

「擇友」(16)

惡詩皆得官　　惡詩は皆官を得
好詩空抱山　　好詩は空しく山を抱く

「懊惱」(17)

いずれも詩の冒頭から数句の引用であるが、一部であっても、孟郊の考え方は十分うかがえると思う。この思いに老残の意識が加わるにつれ、「秋懷十五首」や「峽哀十首」(18)に典型的に見られるような、激しい被害者意識の噴出と、教戒的な「古」の価値の強調に至るというのが、孟郊の「古」の展開の一面である。

不毛と言えばまことに不毛、頑固と言えばまことに頑固であるが、しかしこうした否定的見地からのみ、その「古」の理念と実践のあり方を律しきるわけにはいかない。なによりその頑固とも言える一途さに孟郊の特徴があるのであり、韓愈らの評価の一因があったからである。また、官界での不遇とそれに由来する貧窮の中に身をおきながら、な

お一途な姿勢を保とうとしたことには、精神的に支えとなる一つの理想像があったのではないかと思われるからである。その理想像とは、盛唐期の高士として知られる元徳秀である。孟郊は晩年ではあるが、「弔元魯山十首」をはじめ、何度か元徳秀に言及し、強い関心を見せている。したがって、孟郊の「古」および処世のあり方を考える上では、元徳秀への関心のよせ方を検討することが一つのポイントになると思われる。以下章を改めて、この点に重点を置いて検討してみたい。

（三）

元徳秀は字を紫芝といい、魯山県（河南省）の令となったことから、一般には元魯山と呼ばれる。「系樂府十二首」[19]などで知られる詩人であり、古文運動家の一人でもある元結の叔父であり、その伝は『舊唐書』文苑伝（巻一九〇）および『新唐書』卓行伝（巻一九四）に載せられているが[20]、その大略を以下に記しておく。幼くして父を亡くした彼は、母に孝養をつくし、科挙の受験の際には、離れるに忍びずに母を背負って長安へ赴いたといい、その没後は墓の側に廬を建てて服喪した。親の存命中に結婚できなかったために、終生妻を娶ることなく、また兄の死後に赤子が残され、乳母も雇えないと、みずから乳を与えた[21]という。魯山県令の時には、害をなす虎を殺して罪を贖いたいと願う罪人の言を信じて人々を感嘆させ、また制作した「于鵠于歌」は、玄宗の賞讃を受けた。県令を辞すと、河南の陸渾の山水を愛してそこに住み、弾琴読書を楽しみ、賢不肖の別なく人と交わり、天寶十三年（七五四）、五十九歳で貧窮のうちに生涯をとじた。元結のみならず、李華・蕭穎之・蘇源明らの古文運動家と親しく、これら彼を慕う人々から文行先生と諡された。蘇源明は、「吾不幸にして衰俗に生るるも恥ぢざる所は、元紫芝を識ればなり」とさえ言っている。[22]

元徳秀は、このように徳行の人として当時非常に評価が高く、新興士人層としてみずからの立場・文学を切り開こうとした李華らの古文運動家にとって、精神的なよりどころとなる存在であった。そのこと、古文運動家と元徳秀の関わりについては、林田慎之助氏に詳論がある。[23] 中唐後期、韓愈らによって古文運動が本格的な活動を見せるようになると、かえって元徳秀に関する発言は目だたなくなるが、それはけして忘れられたわけではなく、むしろ高士のシンボルとして受けとめられるようになっていたようだ。白居易は、「題座隅」詩に「伯夷は古への賢人、魯山も亦た其の徒なり、時なるかな奈何ともする無く、倶に化して餓殍と爲る、彼を念へば益ます自ら愧ぢ、敢へて斯須らくも忘れず」[24]と歌い、また皮日休はその「七愛詩」[25]の一首を元徳秀に劈いている。韓愈・柳宗元らの作品には、直接の言及を見出していないが、復古運動に関わる人々にとって、やはり忘れられぬ存在であったことは疑いなかろう。

そして孟郊は、「弔元魯山十首」を中心に、現存する当時の人々の作品の中で、もっとも多くの元徳秀への発言を残している。これはやはり特筆されるべきことであり、元徳秀への関心の寄せ方を見ることは、彼の「古」の意識を検討する上で有力な手がかりとなるだろう。以下まず「弔元魯山十首」を掲出し、その検討から入っていくことにしたい。

第一首

搏鷙[26]有餘飽　搏鷙　餘飽有るも
魯山長飢空　魯山　長に飢空
豪人飫鮮肥　豪人　鮮肥に飫くも
魯山飯蒿蓬　魯山　蒿蓬を飯す
食名皆霸官　名を食するものは皆霸官

食力乃堯農　力を食するものは乃ち堯の農
君子恥新態　君子は新態を恥づ
魯山與古終　魯山　古へと終ゆ
天璞本平一　天璞　本(も)と平一なるも
人巧生異同　人巧　異同を生ず
魯山不自剖(27)　魯山　自ら剖かず
全璞竟沒躬　全璞にして竟に躬を沒す

（大意）猛禽が獲物を捕えるごとくに権力をふるうものは十分満腹していても、元魯山はいつも空腹。金持ちはご馳走に飽きていても、魯山はよもぎを食べるだけ。名で食うものは、皆仁義を軽んじて栄達した官吏。力で食うものは、堯帝の昔からの純朴な農民。君子は新しい事態になずむのを恥じ、それゆえ魯山は古えを守ったまま死んだ。生れながらの本性はもともと等しいものだが、巧らみの心によって差が生じる。魯山は自らを劈いて世俗に合わせることをせず、本性をまっとうしたままその身を終ったのだ。

第二首

自剖多是非　自ら剖くは多く是れ非なり
流濫將何歸　流濫　將(はた)た何(いず)れに歸せん
奔競立詭節　奔競　詭節を立て
凌侮爭怪輝　凌侮　怪輝を爭ふ

五帝坐銷鑠　五帝　坐ろに銷鑠し
萬類隨衰微　萬類　衰微に隨ふ
以茲見魯山　茲を以て魯山を見れば
道蹇無所依　道蹇みて依る所無し

（大意）自ら劈いて世俗に合わせることはなすべきではない。みだれ流されて、いったいどこに落ちつくことになるか知れはしない。世の中はわれがちに争って、いつわりの節操をたて、しのぎあなどりあって、あやしげな輝きを競う。それがために聖代の五帝の道もいつのまにかとけ消え、万物は衰微してしまったのだ。この有様から元魯山の生き方を見れば、その行わんとする道は、険しくて依り所もない。

第三首

君子不自蹇　君子は自ら蹇まず
魯山蹇有因　魯山　蹇むに因有り
苟含天地秀　苟も天地の秀を含まば
皆是天地身　皆是れ天地の身
天地蹇既甚　天地　蹇むこと既に甚だし
魯山道莫伸　魯山　道　伸ぶる莫し
天地氣不足　天地　氣　足らず
魯山食更貧　魯山　食　更に貧し
始知補元化　始めて知る　元化を補ふに

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって

竟須得賢人　竟に賢人を得るを須ふを

（大意）君子は自分から苦しむようなことはしない。元魯山が苦しんだのには理由がある。かりにも天地のすぐれたところを含み持てば、すべて天地によって成った身体。天地が苦しむことすでに甚だしいのであれば、魯山の行う道は伸展のしようがない。天地に万物を育む気が不足しているのであれば、魯山の食はいっそう貧しい。始めてわかる。造化の働きを補うべく政治を行うには、結局賢人の手が必要だということが。

第四首

賢人多自霾　賢人は多く自ら霾す
道理與俗乖　道理　俗と乖ふ
細功不敢言　細功　敢へて言はず
遠韻方始諧　遠韻　方に始めて諧すべし
萬物飽爲飽　萬物　飽くを飽くと爲し
萬人懷爲懷　萬人　懷くを懷くと爲す
一聲苟失所　一聲　苟も所を失はば
衆憾來相排　衆憾　來りて相排す
所以元魯山　元魯山の饑衰して
饑衰難與偕　與に偕ひ難き所以なり

（大意）賢人は多くみずから身をくもらせて、存在を明らかにしない。行う道理が俗と異なっているのだ。小さな功績は口にしよ

うとしない。高遠な言葉であってはじめて賢人と調和する。万物は実際に飽いて飽いたと感じ、万人は現実にふところに懐いて懐いたと感ずるもの。ひと声でも、その思うところをはずれようものなら、もろもろの恨みが集って押しのける。元魯山が飢え衰えて、世俗と調和することができなかった理由もそこにある。

第五首

遠階無近級　遠階　近級無し
造次不可昇　造次に昇るべからず
賢人潔腸胃　賢人　腸胃潔(きよ)く
寒日空澄凝　寒日　空しく澄凝たり
血誓竟訛繆　血誓　竟に訛繆
膏明易煎蒸(28)　膏明なれば煎蒸され易し
以之驅魯山　之を以て魯山を驅らば
疎迹去莫乗　疎迹　去りて乗ずる莫し

（大意）高きに至る階段には近道などはない。たちまちのうちに登ることはできないのだ。賢人は、はらわた清く食もなく、寒ざむとした日には空しく澄みこおるありさま。しかし、血をすすっての誓いも結局はあてにならず、膏(あぶら)は明らかなためにかえって燃やされて身を失いやすいものだ。こんな俗世の道理で元魯山を駆りたてれば、足あともまばらな道すじは、後を追いかけようもない。

第六首

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって　三四

言從魯山宦　言に魯山の宦に從ひ
盡化堯時心　盡く化す　堯時の心に
豺虎恥狂噬　豺虎　狂噬を恥ぢ
齒牙閉霜金　齒牙　霜金を閉ざす
競來闢田土　競ひ來りて田土を闢き
相與耕嶔岑　相與に嶔岑を耕す
常宵無關鑠　常宵　關鑠無く
竟歲饒歌吟　竟歲　歌吟饒し
善教復天術　善教　天術を復し
美詞非俗箴　美詞　俗箴に非ず
精微自然事　精微　自然の事
視聽不可尋　視聽　尋ぬべからず
因書魯山績　因りて書す　魯山の績を
庶合簫韶音　庶くは簫韶の音に合せん

（大意）魯山令の官に就き、人々をみな堯帝の昔の純朴な心に教化する。豺や虎もむやみに人を咬むことを恥じ、冷たくかたいそのきばをとざす。人々は競って田を開墾し、一緒になって高い嶺まで耕やす。夜はいつも戸じまりせず、一年中人々の喜びの歌声が満ちる。すぐれた教化は天のわざを回復し、美しい言葉は世俗のいましめの語などとは異なるもの。教化の深奥微妙なところは自然のうちになしとげられることで、見聞きできるようなことがらではない。そこで、ここに元魯山の功績を記す。どうか

雅正な舜帝の音楽に調和してほしいものだ。

第七首

簫韶太平樂　簫韶　太平の樂
魯山不虛作　魯山　虛しく作さず
千古若有知　千古　若し知有らば
百年幸如昨　百年　幸ひに昨の如し
誰能嗣教化　誰か能く教化を嗣ぎ
以此洗浮薄　此を以て浮薄を洗はん
君臣貴深遇　君臣　深遇を貴び
天地有靈槖(29)　天地　靈槖有り
力運既艱難　力の運は既に艱難たり
德符方合莫(30)　德の符は方に莫に合すべし
名位苟虛曠　名位　苟も虛曠ならば
聲明自銷鑠　聲明　自から銷鑠す
禮法雖相救　禮法　相救ふと雖も
貞濃易糟粕　貞濃　糟粕たり易し
哀哀元魯山　哀哀たり　元魯山

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって

畢竟誰能度　畢竟　誰か能く度(はか)らん

（大意）舜帝の楽は太平の音楽であり、元魯山は現実と無関係にその楽を奏でることはしなかった。遠く千年を離れてでも、もし知己を得られれば、百年の時間も昨日のように感じられるものだ。いったい誰が魯山の教化の後を嗣ぎ、それによって世俗の浮薄を一洗することができるのか。君臣の関係には、よく理解して任用することが尊ばれ、天地の活動には、霊妙なふいごの働きがある。力による治政の命運はすでにゆきづまって困難な状態となり、徳治のきざしは、ちょうど幽冥の世界の意志にかなっている。名誉や地位がかりにも空しいものなら、それにともなう装飾はおのずととけ消えてしまう。礼のきまりが守っても、貞潔でねんごろな行いは、とかく粗末にされてしまいがちだ。ああ哀しいことだ、元魯山。結局のところ誰がその行いを思いうるのか。

第八首

當今富教化　當今　教化富み
元后得賢相　元后　賢相を得たり
氷心鏡衰古　氷心　衰古を鏡(てら)し
霜議清遐障　霜議　遐障を清む
幽埋盡光洗　幽埋　盡く光洗し
滯旅免流浪　滯旅　流浪を免れしむ
唯餘魯山名　唯だ餘す　魯山の名
未獲旌廉讓　未だ廉讓を旌はすを獲ず
二三貞苦士　二三　貞苦の士

刷視[31]聳危望　視を刷ひて危望を聳かす
髪秋青山夜　髪秋なり　青山の夜
目斷丹闕亮　目斷す　丹闕の亮かなるを
誘類幸從茲　類を誘ふこと幸ひに茲從りせん
嘉招固非妄　嘉き招きは固より妄りに非ず
小生奏狂狷　小生　狂狷を奏し
感惕增萬狀　感惕して萬狀を增す

（大意）現在は教化が豊かに施され、天子は賢相を得られた。賢相の清らかな心は古えが衰えた今の情況を写し出し、厳正な議論は遠い辺境までも静める。人知れず埋もれている賢者にことごとく光をあて、苦しむ人々を流浪から救い出す。しかしその善政から、元魯山の名のみが落ちており、いまだに清廉謙譲の徳によって顕彰されるに至っていない。二三の貞直で貧苦の士が、詔勅を待って、目をこすってはるか高く望みやる。だが白髪にて山中にあるこの夜、宮闕の明らかな輝きを望もうにも、目路は断たれてしまう。魯山の仲間である賢者たちを招くには、まさに彼の顕彰から行われなくてはならず、立派なお招きは、もとよりいつわりであってはならない。私はここに狂狷なる要望を申し上げ、心が動きおそれて、千々の思いがいっそうわき上がる。

第九首

黄犢不知孝　黄犢　孝を知らず
魯山自駕車[32]　魯山　自ら車を駕す
非賢不可妻　賢に非ざれば妻るべからず
魯山竟無家　魯山　竟に家無し

孟郊「弔元魯山十首」をめぐって　三八

供養恥它力　供養　它力なるを恥づ
言詞豈纖瑕　言詞　豈に纖瑕あらんや
將謠魯山德　將に魯山の德を謠はんとすれば
海賾(33)誰能涯　海賾誰か能く涯(きわ)めん

（大意）黄色い子牛は孝道を知らない。だから元魯山は自分で車を馭した。賢者でなければ妻にはできない。だから魯山には家族がなかった。死後の供養を人の手に頼るのは恥ずかしいことでも、その言葉にはわずかのきずもない。魯山の德を謠おうとすれば、海のごとく奥深くてきわめようもない。

第十首

遺嬰盡鶵乳　遺嬰は盡く鶵乳す
何況肉骨枝　何ぞ況んや肉骨の枝なるをや
心腸結苦誠　心腸　苦誠結(けつ)し
胸臆垂甘滋　胸臆　甘滋垂る
事已出古表　事は已に古表に出づ
誰言獨今奇　誰か言ふ　獨り今に奇なりと
賢人母萬物　賢人　萬物に母たり
愷悌流前詩　愷悌　前詩に流る

（大意）のこされた嬰児はすべて乳を与え育てる。ましてや骨肉を分けた兄の子はなおさらのこと。心のうちには苦しくも変らぬ真心が凝結し、胸からは甘い乳の汁が流れる。男が乳を与えることは古えの旌表に見えること。どうして今の世に珍しいことと

言うのか。賢人は万物の母たりうる存在。長大な徳は、前代の詩に広くうたわれている。

孟郊は天寶十年（七五一）の生れであり、元徳秀の死んだ天寶十三年にはまだ幼児であったから、この連作はもとよりその折の作ではない。華忱之は『孟郊年譜』において、洛陽に居を定めて以後の晩年の作と見、元和五、六年ごろと推定しているが、十首前後の連作詩がほとんど晩年に集中していることなど、いくつかの点から考えて、この推定はおそらく誤りないであろう。また、連作詩は一般に一時の作である場合と、同じテーマを時間をかけて追求した場合とがあるが、孟郊の場合はほとんどが前者と考えられ、この作品の場合も、前の詩の表現を承けて次の詩が歌い起こされている例がいくつか見られることから、一時に成ったものと考えられる。孟郊の連作詩は、一般に硬質で難解な表現の多いその詩の中でも、特にその傾向が強いのだが、この作品も例にもれず、他の使用例の容易に見出し難い語句を多数含み、一見しては意味のとらえ難い表現が少なくない。解釈上こまかな検討を要する部分も多いが、紙幅の都合もあり、本稿では先のように一応の解釈として大意を掲出するにとどめておく。

さて、この連作は、前半五首と後半五首では、やや色彩を異にしている。まず、全体の導入である第一首で、連作の主要テーマである、元徳秀は古えの純朴な本性を保持し、それが世俗の名利と相容れないものであったがゆえに貧窮し、飢えて死んだという認識が示され、それは、第五首までの前半部で方向を少しずつ変えながらくり返されている。ここでは、元の具体的人生・思想のあり方にはふれることなく、むしろ古えの道を守った賢人として観念化されており、孟郊の意識の重点は、元のような賢人が悪しき世俗に容れられず、窮死しなければならなかったことへの憤り・悲しみに置かれている。なお、元徳秀の死が餓死であったとは、その伝には記されていないが、盧載の「元徳秀誄」に「誰ぞ元公を死せしめ、餒死空腹たらしむる」[34]とあるように、具体的事情は不明ながら、その死は餓死もしく

はこれに類するものであったらしい。そして先に引いた白居易の「題座隅」詩にも、伯夷と並べて「化して餓殍と爲る」と歌われていたように、そのことは当時共通の認識であったようだ。

第六首からの後半部は、元德秀の伝記中の著名なできごとのいくつかに即しつつ展開される。まず第六首は、魯山県令としての善政ぶりをとりあげる。だが、元の善政には、例えば先に記したような、罪人の言を信じて虎を退治させるという特筆すべき事績も含まれているにもかかわらず、ここでも描かれているのは理想化された〝善政〟であることは注目しておいてよいだろう。ところで、魯山県令としての事績は、元德秀の伝記中に欠かすことのできないことがらだが、この詩での賞讃の仕方を見れば、それが孟郊の元に対する認識の中でもきわめて重要な点であることを示していよう。すなわち、元德秀は正当な機会さえ与えられれば、聖代の政治を実現し、古えの道を回復させることのできる人物であって、ただの高士ではないと受けとめているわけであり、そこに孟郊が彼を悼み、かつ敬慕する思いのポイントがある。第七、八首は、こうした為政者としての元德秀の後継者が世に出ておらず、かつ元自身も顕彰されることもなく忘れられていることへの不満を歌う。なお第八首に登場する「賢相」については、華忱之は德宗朝および憲宗朝の初年に宰相を勤めた鄭餘慶のことと推定する。孟郊は、元和元年（八〇六）冬に河南尹に転じた鄭のもとで、河南水陸運従事、試協律郎に任用され、母の死によって辞任するまで数年間その幕下にあった。のち元和九年の秋に、旅の途中に死ぬことになるのも、山南西道節度使となった鄭に、興元軍参謀、試大理評事として招かれたがためであった。こうした鄭餘慶とのつながりの深さから考えれば、この詩の「賢相」はやはり鄭を指しているとみるのが妥当であろう。個人的な関係をはなれて、一般的見地から「賢相」と呼ばれうる人物は、この時期には見当らない。鄭餘慶は韓愈とも親しく、復古運動にも比較的理解のあった人物であり、この詩はおそらく、個人的なつながりを背景に、元德秀の顕彰と、その道を嗣ぎうる人物の登用を希望する意を示したものであろう。第九首は、妻を娶

ることなく、したがって子の無いまま終ったこと、第十首は、兄の子にみずから乳を与えて養育したことの、いずれも元徳秀の家庭面でのことがらをとりあげている。ともによく知られていたことであるが、とくにこれらのことを歌った背景には、孟郊自身の事情も意識されていたのではないかと思われる。元和三年ごろの作と推定される連作の「杏殤九首」[35]および韓愈の「孟東野失子」[36]詩によって知られるように、孟郊は子供を皆幼少のうちに亡くしていた。妻を娶らなかった元徳秀と事情は異なるにせよ、子の無いことは彼も同じであった。また故郷にほど近い義興県（江蘇省）の荘園に、当時幼いめいを預けていた。このめいをおもいやった同時期の作とみられる「寄義興小女子」詩の最後には、「我は詠ず元魯山の、胸臆に甘滋流るるを、終には當に自ら乳するを學び、起坐常に相隨ふべし」[37]と歌い、元徳秀の自乳の故事にならいたいという思いを示している。したがって、第九、十首とも、自己の置かれた情況と暗に比擬しつつ、その行いを思い慕う気持を歌っていると言うことができよう。

さて、連作全体を通して整理してみると、元徳秀に対する孟郊の認識の重点は、古えの純朴な本性を保持し、機会を与えられれば古代の聖王の教化を回復しうる徳をもつ人物であり、それゆえにまた世俗の容れるところとならずに、山野に隠れて餓死する道をとらざるをえなかったのだという点にあると言えよう。そして注目されることは、元徳秀に深い敬慕の念を寄せるだけでなく、その人となり・運命に、自分自身のそれを重ねている印象のあることである。それは外面的な比擬が認められる最後の二首に顕著であるだけでなく、元が世俗に合わぬがゆえに孤高を守り、貧窮のうちに死なねばならなかったことへの憤りをくり返し歌う前半部についても、貧窮のなかで社会への憤りを投げつけていた当時の孟郊の情況が、その背後に感じとれる点において、同様に見ることができよう。第六、七、八首にしても元の後を嗣ぎうる者として自分を意識している、少なくとも元とのつながりの中に自分を置いていると思われる。

そう考えてくると、元徳秀は孟郊にとって、敬慕の対象であるだけでなく、実践における模範となる人物、一つの理想とするに足る人物であったと言うことができると思われる。ことに晩年に及んで、外面的な類似性が強まるにつれ、その意識は深まったのではないだろうか。そして、元を理想と仰ぐことを一つの支えとして、孟郊は老いと貧窮とに苛まれつつもなお、「古」の価値を頑なに唱え、拙い処世を守り通す道に就いたのではなかったかと思うのである。

孟郊がこの連作詩を書いた理由は、一義的には「古」の道を守った元徳秀を顕彰し、その徳を讃えることにあるが、同時にそうすることによって自らの生き方を明らかにしようとする意図も含まれていたものと思われる。孟郊がいつごろ元について知ったのかは明らかではないが、自分の儒教倫理、「古」の理念が、社会に容れられず、かつ自らの考え方・行動を社会に調和させることもできぬことを思い知ったとき、それはおそらく溧陽(江蘇省)の尉を辞して洛陽に居を定めた以後のことと思われるが、元の生きざまに心を寄せるようになったのではなかろうか。いずれにせよ、孟郊の生き方の一貫性のうらには、元徳秀の存在が有力な支えとして位置づけられていたと思われる。

(四)

孟郊の生き方および「古」の理念のもち方と元徳秀との関わりについて、「弔元魯山十首」を中心に考えてみたが、それをひとまずおいて、やや視点を変えて、孟郊の自己規定と当時の人々の孟郊評価という点から、この問題をさらに考えてみたい。

孟郊は自らを「詩人」と称する。現代からみればきわめてあたりまえのことのようだが、当時においては、「詩人」の意味も、詩経のうたびとの意から普通名詞としての詩人の意にようやく移項したばかりとみられ、自分もしくは志

を同じくする人を「詩人」として語る発言もなお多くを見ることができない情況であった。この点に関しては、山之内正彦氏の検討があるので[38]、それに譲る。ここで問題としたいのは、山之内氏も気づいておられることだが、詩人であることの運命に、多く餓死が付随して語られているということである。まず友人の死を悼む詩から、例を掲げよう。

詩人業孤峭　詩人　業　孤峭にして
餓死良已多　餓死すること良に已に多し
「哭劉言史」[39]

詩人多清峭　詩人　多くは清峭なり
餓死抱空山　餓死して空しき山を抱く
「弔盧殷十首　其一」[40]

いずれも冒頭の二句である。劉言史・盧殷ともに孟郊とは親しく、不遇のままに一生を終った人であった。盧殷に対する韓愈の墓誌銘には、「竟に飢寒により登封に死す」[41]と記されている。しかし、不遇であり飢寒のうちに死んだにしても、それを〝餓死〟と表現する孟郊の認識には、具体的な個人の死をこえた「詩人」の運命に対する観念化が見られると言ってよいだろう。そしてそれは、もとより自らの運命であった。

意恐被詩餓　意に恐る　詩餓を被らんかと
欲住將底依　住まらんと欲するも將(は)た底(なに)か依らん
盧殷劉言史　盧殷　劉言史の

餓死君已噫　餓死せるを　君已に噫(なげ)けり
「送淡公十二首[42]　其十一」

倚詩爲活計　詩に倚りて活計を爲すは
從古多無肥　古へ從(よ)り多く肥ゆること無し
詩飢老不愁　詩飢　老ゆるも愁へず
勞師淚霏霏　師が涙の霏霏たるを勞す
「同　其十二」

これは、江南へ帰る淡公という僧を送る連作の終りの二首からの抜粋であるが、親しい間柄ゆえにやや感傷的な口吻を感じさせながらも、結局のところ自分も詩人として孤峭の業を守りながら飢える道を歩むしかないという思いが語られている。

それでは、なぜ「詩人」の運命は餓死をもって終らなければならないのだろうか。世俗的な食うための詩を書くのでなく、高潔で古えの道に即した詩を作るのであれば、社会と相容れず、困窮することになるのだろうが、それだけで餓死が必然であることにはならない。山之内氏は、孟郊が「詩飢」「餓死」と書かねばならなかった必然性について、その詩的方法の側面から次のように説明する。「精神的な痛みを身体に転移させるというのが、孟郊の独自な詩的方法なのであって、この方法が困窮を対象とするなら、生活と身体とがもっとも鋭く交叉する一点である飢餓が引き出されてくるのは当然であろう。[43]」この孟郊の独自な詩的方法については、「秋懐十五首」を中心に氏に詳しい分析があり、[44]筆者も「峽哀十首」において検討したことがあるので、[45]ここには触れない。山之内氏のこの見解は、先

の疑問に対する一つの有力な解答であると思われる。だが筆者は、それとともに、ここにも元徳秀への意識の投影が作用していると考える。[46] 先に一部を引いた「弔盧殷十首」の第六首の冒頭に、

耳聞陋巷生　耳に聞く　陋巷生
眼見魯山君　眼に見る　魯山君
餓死始有名　餓死して始めて名有り
餓名高氛氳　餓名　高く氛氳たり

と、「詩人」の一人である盧殷に、元徳秀の姿を重ねて見ているのは、その顕著な例であろう。「詩人」は古えの道に即した詩を作るが、それは当世には受け入れられず、結局のところ餓死するしかない、それはもとより望ましいところではないが、餓死することによって高士の列に加わっていくのが自分たち「詩人」の運命であり、あり方なのだというのが、孟郊の認識だったのではなかろうか。餓死せざるを得ないような情況が前提にあったことは確かだろうが、それをあえて甘受したことには、元徳秀の生きざまに対する共感が根底にあったからだと思われる。

さて、こうした認識の持ち主であった孟郊を、周囲の人々はどのように見ていたのであろうか。当時の人々の中では、もとより韓愈が最も多く孟郊を語り、最も高く評価する。その韓愈をはじめとして、孟郊に対する多くの評価の中で注目されることは、彼の文学的成就は貧窮を代償にしてのものであるという認識が色濃く見られることと、人格の高潔さと貧窮とが結びついて語られることが多いということである。

前者については、「大凡物はその平らかなるを得ざれば則ち鳴る」[47]という書き出しで著名な、韓愈の「送孟東野序」がまずあげられるが、この他にも、白居易は張籍らと並べて、「愛琴愛酒愛詩の客、多賤多窮多苦辛、中散歩兵終に

貴からず、孟郊張籍貧に過ぐ[48]」と歌い、また「況んや詩人は蹇しむこと多し。陳子昂、杜甫の如きは、各おの一拾遺を授けられ、迤剝して死に至る。李白、孟浩然の輩は、一命にも及ばずして、窮悴して身を終ゆ。近日、孟郊は六十にして試協律に終り、張籍は五十にして未だ一太祝を離れず[49]」と論じており、さらに陸亀蒙は、天物の情状を暴露したために天の罰を受けた詩人の列に、「東野窮す」として彼を加えている。[50]この文学的成就が困窮の代償としてある、あるいは「萬物を陵暴に困しむる[51]」がゆえにその咎を受けて困窮する、という考え方は、当時の文学論に顕著に見られるものであり、[52]孟郊に対する発言も、その全体の中に位置づけて考える必要があるが、しかし、孟郊がそうした文学者の代表格として意識されていることは見のがせない。

後者の、高潔さと貧窮とが結びつけられた発言は、とくに友人を中心に見られるものだが、やはり韓愈の言にまず耳を傾ければ、次のように言っている。「足下は才高く氣清く、古の道を行ひて、今の世に處す。田つくりて衣食す る無く、親の左右に事へて違ふ無し。足下の心を用ふること勤なり。足下の身を處すること勞にして且つ苦し。混混と世と相濁するも、獨りその心は古人を追ひて之に從ふ。[53]」また李翺は、推薦の文の中ではあるが、「茲に平昌の孟郊なるもの有り、貞士なり。（略）郊、窮して餓ゑ、その親を安んじ養ふを得ず、天下に周きも遇さるる所無し[54]」と言い、賈島は哀悼の詩に、「才行古人に齊しきも、生前品位低し[55]」と歌う。友人の言であり、しかも多く推薦や哀悼の言葉であれば、もとより割り引きして受けとる必要はある。また、不遇の士を高潔さゆえと記すのも、珍しいことではない。しかし、孟郊は貧窮の中にあっても、貞潔な行いを守り通したと認識され、それが古人の行いに学ぶものと受けとめられていたことは、やはり、その評価の要点として考える必要があろう。

このように見てくると、孟郊の評価には、その生活同様貧窮がつきまとっているわけであるが、文学・人格ともその貧を乗りこえて高みに達していると認定されることによって一連の高い評価を得ていると言えよう。それには、頑

ななまでに「古」の道に固執し、貧窮をも辞さぬ孟郊の生き方が、ある種の感動を与えたということがもとよりあるだろうが、それとともに、士人層に、そういう人を高士として認識する素地があったということも言えるのではなかろうか。その際、高士のイメージにはさまざまなモデルがありえてよいわけであるが、盛唐後期から古文運動を中心とした復古主義の活動を行ってきた人々にとって、元徳秀が大きな位置を占めていたのであり、それは孟郊を高く評価した人々に対しても、小さからぬ影を落していたと思われる。当時の士人層の間に、伯夷、顔回などより身近かな存在である元徳秀を一つのモデルとした高士のイメージがあり、おそらくそれが孟郊の評価にも間接的に影響し、また孟郊自身の「弔元魯山」詩に見られるような比擬に対しても理解を与えたのではないだろうか。なお、これは本稿の論旨とはやや離れることであるが、唐代において比較的高かった孟郊の評価は、宋代以降は一転し、古文家の一人でもある蘇軾の「寒蟲の號び」[56]との評語に代表されるように、貧窮をあくことなく歌い、世道人心に呪詛を投げつける側面を酷評されて、甚だ低い評価を受けることになる。その変遷については、これも山之内氏の整理があるのでそれに譲りたい。ただ、山之内氏はあくまで孟郊の文学の方法・性格、および時代の好尚という点から評価の差異を説明されているのだが、それはその通りであるとして、もう一つ、唐人が孟郊を高く評価した背景には、孟郊が生き方の模範として求めた高士のイメージが、新興勢力として官界に位置を占めるべく、自らの文学と理念とを求めて活動した士人層の共感を得るものであったということがあり、士人層の勝利が決定する宋代以降には、その共感がすでに遠いものとなって、むしろその頑なな側面ばかりが目立ってしまったということも、指摘できるのではないかと思われる。

さて、以上のように、孟郊の「詩人」としての自己規定、および孟郊の評価について検討してきたが、いずれにも、背景に孟郊のもった高士のイメージ、ことに元徳秀への敬慕と比擬とが影を落しているということが指摘できた

と思う。

（五）

韓愈が貞元十四年（七九八）ごろ汴州（河南省）で孟郊と別れる際に贈った詩、「答孟郊」[58]の前半に、当時の孟郊の様子を次のように描いている。

規模背時利　規模　時利に背き
文字覷天巧　文字　天巧を覷ふ
人皆餘酒肉　人　皆　酒肉餘れるに
子獨不得飽　子　獨り飽くを得ず
纔春思已亂　纔かに春にして思ひは已に亂れ
始秋悲又攪　始めて秋にして悲しみ又攪る
朝餐動及午　朝餐　動もすれば午に及び
夜諷恒至卯　夜諷　恒に卯に至る

世間と規格が合わず、文学は造化の秘密にせまる。生活に事欠きながら、感受性豊かに、日常の生活時間をも無視して詩作に耽る。川合康三氏も指摘されるように[59]、ここには古今を問わぬ、天生の詩人の姿が描かれていると言ってよい。孟郊が自身を「詩人」と規定する、その背景には、先のようなある思い入れが存在したわけだが、しかし彼は、その規定以前に生れながらにして詩人としての資質を持ちあわせていた。そして、彼は結局その資質のままに生きた

人だと思われる。

韓愈・李翺・張籍らと親しく交際し、復古運動においても漢魏詩の風格に学ぶその詩作によってその一翼を担ったが、文章らしい文章を残していない[60]ことからみれば、古文運動においては寄与するところはあまり大きくなかったものと思われる。その詩の感性、「古」の理念・儒教倫理における観念性から考えれば、孟郊は理論家ではなかった。理論を軸に組みたてる文章は、得意とするところではなかったのであろう。しかし、孟郊は、詩作とともに、その「古」への志向によって、復古運動の中で重きをなしたのだと思う。観念的な「古」の理念と狂信的とも言えるその唱道は、社会的にはほとんど効果を持ちえなかったであろうが、韓愈たちにとっては、社会に受け容れられずとも頑なに姿勢を守り続ける孟郊の態度は、自分たちの立場を切り開いていく上で精神的な支えとなったのではないかと思われる。さればこそ、先のような評価も受けたのである。孟郊が元徳秀に心を寄せたのは、彼自身の「古」の道を一貫させる支えとするためであったと思う。だが、視野を広げて復古運動の中で考えてみると、元徳秀に学ぼうとした孟郊は、また韓愈たちの精神的支えであった。ちょうど、元徳秀が李華、蕭穎之らの精神的支えであったように。それが孟郊の望むところであったか否かはもとよりわからない。が、ともかくそこに、孟郊の「古」の実践の意義があったと思われる。

(注)

(1) 「韓文公與孟東野友善、韓公文至高、孟長於五言、時號孟詩韓筆」(趙璘『因話録』巻三) など、両者を並べて語る評語は少なくない。

(2) 「冥觀洞古今、象外逐幽好、横空盤硬語、妥帖力排奡」(「薦士」詩。錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』二三一頁)。以下、韓愈の詩は同書に、文は馬通伯『韓昌黎文集校注』に依り、それぞれ『集釋』『校注』と略称してその頁数を示す。

(3)「塵埃徐庾詞、金玉曹劉名」（「贈蘇州韋郎中使君」詩『孟東野詩集』巻六）。本稿では孟郊の詩は、景宋本『孟東野詩集』（一九六七年大安書店影印）を底本とし、明弘治刊本『孟東野詩集』（『四部叢刊初編』所収）および華忱之校訂『孟東野詩集』（一九五九年上海人民出版社刊）を参照した。以下『孟東野詩集』からの引用は、巻数のみ記す。

(4)「其高出魏晉、不懈而及於古、其他浸淫乎漢氏矣」（「送孟東野序」『校注』一三六頁）

(5) 巻十

(6) 孟郊の伝記は、『舊唐書』巻一六〇、『新唐書』巻一七六、韓愈「貞曜先生墓誌銘」『校注』二五六頁、元、辛文房『唐才子傳』巻五などによって大要を知ることができる。また華忱之に「孟郊年譜」（前出『孟東野詩集』に付載）がある。

(7)『舊唐書』『新唐書』いずれの伝にも、「少隱於嵩山」と記されるのみで、具体的事情を語るものは残されていない。

(8)『集釋』六頁

(9)『集釋』二八頁

(10) 詩中の「古」字の用例は一〇八例、また詩題では十一例に及ぶ。なお「古怨」「古別離」いずれも巻一。孟郊の詩には他に「高」「道」「君子」などの用例も多く、単純な言い方になるが、まずそのあたりに、彼の思想的な大筋を見てとることができよう。

(11) 巻二

(12) 巻四。なお第十一句の「亦」は、底本は「上」に作るが、諸本に従って改めた。

(13) 山之内正彦「孟郊詩論（上）―連作詩を中心に―」（東洋文化研究所紀要第六八）。この詩についてはその六五頁。

(14) 巻一

(15) 巻二

(16) 巻三

(17) 巻四

(18) 巻十。なお「峽哀十首」については、拙稿「孟郊「峽哀」詩試論」（中哲文学会報、第四）も参照されたい。

(19)『全唐詩』巻二四〇

(20) 元德秀の伝記については、この他、元結の「元魯山縣墓表」（『全唐文』巻三八三）、李華の「元魯山墓碣銘」（『全唐文』巻三二〇）などの資料がある。また李肇『唐國史補』錢希白『南部新書』などに逸事を記す。

(21) 『舊唐書』によれば、「初、兄子襁褓喪親、無資得乳媼、德秀自乳之、數日湩流、能食乃止」と記されている。

(22) 「蘇源明常語人曰、吾不幸生衰俗、所不恥者、識元紫芝也」（『舊唐書』元德秀伝）

(23) 「唐代古文運動の形成過程」（日本中国学会報、第二九）

(24) 「伯夷古賢人、魯山亦其徒、時哉無奈何、俱化爲餓殍、念彼益自愧、不敢忘斯須」。「題座隅」詩は顧学頡校点『白居易集』（中華書局刊）巻七。なお「俱化爲餓殍」の句には、「元魯山山居阻水、食絶而終」との自注がある。

(25) 『皮子文藪』巻十

(26) 『淮南子』原道訓「秋風下霜、致生挫傷、鷹鵰搏鷙、昆蟲蟄藏」など、力の強い鳥が獲物を捕えることを言う語だが、ここは権力・武力を握る者の比喩と解した。なお、以下注釈を加えるべき個所は多いが、冗漫にわたる恐れもあり、とくに必要と思われるものにとどめたい。見慣れない熟語が多数あるが、その大半は他の使用例が容易に見出しえないものであることを言い添えておく。また、孟郊の詩の注釈書としては、選注本として夏敬観『孟郊詩選注』（『萬有文庫薈要』）、劉斯翰『孟郊賈島詩選』（三聯書店）が、全篇にわたるものとしては陳延傑『孟東野詩注』（台北、新文豊出版公司）があるが、この連作については、あるいは収めず、またあるいは詳細な注を施さず、あまり参考とはならない。

(27) 「自剖」は、東方朔「七諫・怨思」（王逸『楚辭章句』巻十三）の「比干忠而剖心、子推自割而飤君兮」を参考として、自ら君主、世俗に合わせることと解してみた。

(28) 『漢書』兩龔鮑伝に「膏以明自銷」とある。なお「煎蒸」は他の用例を見出していない。

(29) 『老子』第五章に「天地之間、其猶橐籥乎」とあるのをふまえたものか。

(30) 「合莫」は『禮記』禮運篇の「君與夫人交獻、以嘉魂魄、是謂合莫」とあるのをふまえるか。

(31) 「石淙十首、其十」（巻四）に「勁飈刷幽視」とある。

(32) 元德秀が母を自ら背負って長安へ出たことは知られるが、自ら車を駕したことについての記事は見出せない。

(33) 弘治本、全唐詩などでは「蹟海」に作るが、いずれも他の用例は見出せない。なお、宋國材・劉辰翁評『孟東野詩集』には、この部分（同書は「蹟海」に作る）に、「毎有此等新字」との宋の評語を記す。

(34) 「元德秀誄」は『全唐文』巻四三五。その全文は、「誰爲府君、犬必啗肉、誰爲府僚、馬必食粟、誰死元公、餒死空腹」である。

(35) 巻十
(36) 『集釋』二九三頁
(37) 「我詠元魯山、胸臆流甘滋、終當學自乳、起坐常相隨」（巻七）
(38) 前掲論文二三頁
(39) 巻十
(40) 巻十
(41) 「竟飢寒死登封」（「登封縣尉盧殷墓誌」『校注』二一一頁）
(42) 巻八。なお第十一首は第五句より第八句まで、第十二首は第九句より第十二句までの引用である。また第十二首は、山之内氏前掲論文十九頁に注解がある。
(43) 前掲論文二三頁
(44) 前掲論文第二章
(45) 前掲論文
(46) 「哭劉言史」「弔盧殷十首」「送淡公十二首」いずれも「弔元魯山十首」同様、晩年の作と推定されている。
(47) 「大凡物不得其平則鳴。」
(48) 「愛琴愛酒愛詩客、多賤多窮多苦辛、中散歩兵終不貴、孟郊張籍過於貧」（「詩酒琴人、例多薄命、予酷好三事、雅當此科、而所得已多、爲幸斯甚、偶成狂詠、聊寫愧懐」詩、七言排律の冒頭四句。『白居易集』巻三二）
(49) 「況詩人多蹇、如陳子昂、杜甫、各授一拾遺、而迺剝至死、李白、孟浩然輩、不及一命、窮悴終身、近日、孟郊六十、終試協律、張籍五十、未離一太祝」（「與元九書」『白居易集』巻四五）
(50) 「吾聞淫畋漁者、謂之暴天物、天物即不可暴、又可抉摘刻削、露其情狀乎、使自萌卵至於槁死、不得隠伏、天能不致罰耶、長吉夭、東野窮、玉溪生官不挂朝而死、正坐是哉、正坐是哉」（「書李賀小傳後」『甫里先生文集』巻一八）
(51) 韓愈の「薦士」詩に見える詩句。「勃興得李杜、萬物困陵暴。」
(52) 例えば、韓愈の「荊潭唱和詩序」（『校注』一五三頁）、「柳子厚墓誌銘」（『校注』二九四頁）など。なお、韓愈のこうした考え方については、羅根澤『中国文学批評史』第四編第七章四「〝不平則鳴〟與〝文窮益工〟」の項に整理があり、また林田慎之助

「韓愈における發憤著書の説」（文学研究、第七十）にも論がある。

(53) 「足下才高氣清、行古道、處今世、無田而衣食、事親左右無違、足下之用心勤矣、足下之處身勞且苦矣、混混與世相濁、獨其心追古人而從之」（「與孟東野書」『校注』七九頁）

(54) 「茲有平昌孟郊、貞士也、（略）郊窮餓、不得安養其親、周天下無所遇」（「薦所知於徐州張僕射書」『李文公集』巻八）

(55) 「才行古人齊、生前品位低」（「弔孟協律」詩『長江集』巻三）

(56) 「讀孟郊詩二首、其一」（『東坡集』巻九）に見える言葉。本文のみ全篇を掲げる。「夜讀孟郊詩、細字如牛毛、寒燈照昏花、佳處時一遭、孤芳擢荒穢、苦語餘詩騷、水清石鑿鑿、湍激不受篙、初如食小魚、所得不償勞、又似煮彭蜞、竟日持空螯、要當鬬僧清、未足當韓豪、人生如朝露、日夜火消膏、何苦將兩耳、聽此寒蟲號、不如且置之、飲我玉色醪」

(57) 前掲論文三頁より八頁。

(58) 『集釋』二七頁。なお、この詩の後半にも「古心自ら鞭つと雖も、世路終に拗き難し　古心雖自鞭、世路終難拗」と「古心」の語が見える。韓愈の詩に「古心」が歌われるのは先の「孟生詩」とこの詩のみであり、いずれも孟郊について言われていることは注目してよいだろう。

(59) 「韓愈の「古」への志向――貞元年間を中心に――」（集刊東洋学、第五一）五九頁

(60) 現存する孟郊の文章は、「讚維摩詰」「上常州盧使君書」「又上養生書」（いずれも巻十）の三篇のみである。書の二篇は比較的長文であるが、論旨は観念的で単調であり、文章を必ずしも得意としなかったことがうかがわれる。